

プロジェクト型保育推進事業 保育の質の向上研修

平成26年度「報告会」



講演・指導：神戸大学大学院 准教授 北野 幸子 氏

講演「これからの保育・乳幼児教育」

これまで学んできたことの確認から

幼児の学びの特徴・・・ 無自覚の学び 目的思考型で学ばない

感性（気持ち）が先にある

・概念理解は8歳頃からであることから、シャワーのように言葉を浴びせられても語彙の習得をしない。体験の豊かさ、自然との触れ合いが無自覚に学ばせる。「～しなさい」でなく「私が～したい」というように、スタートに活動の動機づけがあり、どれだけ自分の気持ちが入っているかによって、同じことをしても結果が違ってくるということが研究でわかっている。

指示、命令よりも、気持ち（おもしろそう、やってみよう）を起点とする方が明らかに子どもの育ちが導かれる。

・保育士は、専門職として「この時期にこの育ちを保障」しなければならない。発達を見ぬき個人差を理解し、育ちのその先、学びの見通しを（期待をこめて）見ていくことで、子どもの育ち（有能感）が変わる。個人差をネガティブにとらえると、自信のない子に育ったり、意欲が生まれなかったりする。

自分で考え→決め→行動するを、生活やあそびの中でたくさん培ってほしい。

・乳幼児の保育の基本は、基本的信頼感が大前提。安心、大切にされている居心地が良い・・・が後の対人関係や学習姿勢の基礎となる。基本的信頼感にささえられた上で、自分で考え→決め→行動するを積み重ねていくことが大切。

・年齢ごとの遊びと学びについて （資料参照）

幼児期は遊びと学びをわけては考えられない。小学校以降の目的思考型に行くには、発達のプロセスがある。まずは興味関心（おもしろい！なぜ？）気持ちの起こりがスタート→五感を十分に使って外界と触れ合い親しむと→比べたり分けたりしたくなり→さらに知りたく分けたく・・・と探求していく→よく知ると人に伝えたい、表現したい→友だち、先生、クラスみんなと共有し→目的思考型へと進んでいく。

・発達には個人差がある。例えば、1つの事柄の現れる期間の長短（ハイハイする期間が長い短い）現れる時期の早遅（歩きはじめが早い遅い）。しかし発達の順序性は一定であることを知っておき、個人差、個性に応じ一人ひとりを大切にする。

・家庭との連携 家庭において、指示や命令ばかりであったり、話を聞いてもらっていなかったり、お稽古事に追われるなど、子どもの背景にある家庭の状況が心配な現代、家庭にむけての発信が重要である。

保育の中で大事にしていること、どう育てているか、どう育てたいかを、また専門職として、小学校以降とは特徴がちがう保育の独自性と重要性や子ども主体の保育、環境を通じた保育がなぜ大切なのか、それによってどんな力が育つのかを保護者、社会に発信してほしい。



講演資料(パワーポイント)

これからの保育・乳幼児教育

北野幸子
(神戸大学大学院)

遊び≒学びの援助へ

幼児の学びの特徴 「無自覚の学び」

保育者の教育の特徴 「自覚的な援助」

幼児期に児童期の学びにつながる
好奇心・探求心・あこがれを育む
知性への信頼の基盤をつくる
↓
児童期の学びへ

子ども(発達・感情・性格、等)を知り
協同的な学びを育むには

発達についての基礎知識
発達を見抜く、知識の活用能力

+

学びの軌跡を踏まえる
学びの見通しをもつ

「暗記」型から「活用」型の学びへ

子どもの生きる力を育てるには

自分で考えること
(知識と技術を活用して)
↓
自分で決めること
↓
自分で行動すること

生きる力・問題解決能力を育むために

乳幼児期の保育の基本

基本的信頼感
子どもの育ちの根幹

温かいまなざし(関心)と、過度でない期待

↓

基本的生活習慣 人間関係形成力
社会性 自己肯定感 学びの意欲

育ちの前提

人への基本的信頼感を培う
(信頼感に支えられ)
↓
生活を楽しむ
自分の力で行動することの充実感を味わう
↓
身近な人と親しみ、関わりを深め、
愛情や信頼感を持つ
(意欲や態度が培われる)
↓
さらに人と関わる

社会性の育ち
* 伝えたい気持ち 聴きたい気持ち → 学びの基礎の育ち

乳幼児期の学びの基礎をはぐくむ教育
(基礎学力、学びに向かう力、とその教育)

乳幼児期の学びの基礎
知性への信頼を育てる

* 到達度評価の開示や、成績をつけない理由

学びの基礎をはぐくむ教育の必要性:
教育格差の実態から
SES研究の国際動向
幼児期の教育とは

0, 1歳の遊びと学び

親・保育者との
人間関係が中心
基本的信頼関係を形成
一人遊びの最中や、区切りに親・保育者に抱きつく、見
せにいく
好奇心が旺盛



1, 2歳児の遊びと学び

自我の芽生えや自己主張のえられる遊び



例) 親や保育者の干渉に「いやだいやだ」「自分で自分で」といって拒否する

友達のかかわりを拒否する
おもちゃを渡さない



3歳児の遊びと学び

親・保育者との信頼関係の成立
愛着から精神的依存関係へ

遊びを通じた友達関係のはじまり

仲間意識の芽生え

4歳児の遊びと学び

遊び仲間の成立

クラスの友達へのまなざし
(個性、類似性、異質性への関心)

4歳児の遊びと学び

自己中心性から他者への関心と協同へ
時系列的記憶の形成へ

(援助)

まずは個を認める
いざごは見守る
言葉への置き換えを試みる 気持ちを尋ねる
友だちとの関係づくり(声かけ、遊びづくり)
友だちへの意識化(友だちを話題に)

5歳児の遊びと学び

固定的遊び仲間の成立

ルールの活用

人間関係の複雑さへの気づき
クラスの一員としての自覚
クラス、園、地域、社会への関心

乳幼児期の保育の基本

基本的信頼感

子どもの育ちの根幹

温かいまなざし(関心)と、過度でない期待



基本的生活習慣 人間関係形成力
社会性 自己肯定感 学びの意欲

幼児から児童へ

保育者のみとり、子どもの振り返りへの促し
応援や励まし、賞賛
(「わかった」、「できた」の意識化)

体験から学ぶ: 言葉、各種リテラシー

学びの喜び、自信、自らの知性への信頼を育む



達成感、有能感を与え、継続する力、粘り強さへ、諦め
ない気持ち、そして学びの楽しさを育む
知識と技術を体系的に身に着ける基礎力となる

遊びこみ(没頭)から問い(学び)へ

遊びこみ(没頭) → 目的の意識化

好奇心・探究心・あこがれ



外的な(モノ・人)への意識

目的の具現化

(目的と活動の双方向性を繰り返しながら)

体験とことば、教育内容へ

幼児期

言葉は体験の中で意味を持つ
体験に根差した豊かな言葉を蓄える
体験に根差した言葉を使う

児童期

自立した言葉の活用へ



幼児期の言葉：学びの基礎

保育におけるリテラシーの発達と学び (Carol Vulelich) (PECERA 20140808)

8歳までが大切：言葉の基礎力の獲得
格差 (3歳で1100語：毎日7語、／3歳で525語)

言葉を浴びせる×、意図的な働きかけ (体験)

interactive reading

まず心 (情意) から、内容 (知識・技術) へ

情意の部分

知性への信頼を育てる
面白い気持ち
知りたい気持ち
できるようになりたい気持ち

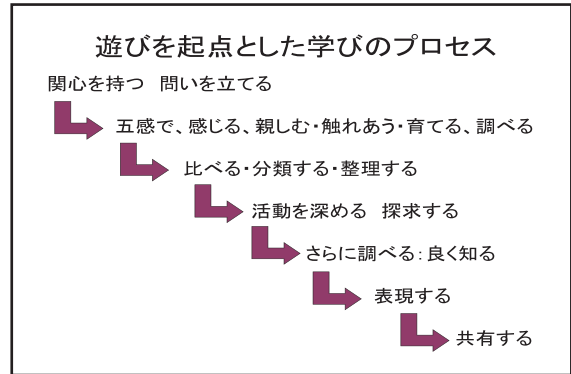
自分への信頼を育てる
達成感、有能観
楽しむ、あきらめない、頑張る、続ける

隠れた学び → 自覚的な学び への転換

<自覚的な学びは幼児期の後半に徐々に進行>

小学校教育

自覚的な学び 学習規律の習得 (セットで)
特に：小学校1年生の前半
十分な自覚的な学びとは言えない
アクティブ (活動的な) 学びのスタイル



保育者のかかわり方

実感のある経験、生活現実化と対人関係への意識
気になる 関心を持つ
実際に共に遊び・生活する

感情ゆたかな経験の共有
嬉しい気持ち
悲しい気持ち
共感すること

知性への信頼を育む

保育者の言葉

単語を投げかけるのではなく文章で話す

間違いの指摘より、正しいモデルに

豊かな、より高いレベルの言葉を使って話す

「はい」「いいえ」ではなく、オープンエンド質問

意図的一人ごと・パラレルトーク

家庭との連携

幼児の**家庭**生活にまなざしをむける

自己主張が認められているのか

主体性が発揮されているのか

指示・命令を浴び続けていないか

お稽古事に追い立てられていないか

子育て支援から家庭との連携へ

家庭との連携

家庭教育環境への働きかけ
家庭教育力の向上への啓発

家庭との連携で配慮すること

日常性
双方向性
園での教育と家庭教育の継続

**専門職としての保育者に
これから求められるもの**

保育の独自性についての発信

- * 子どもの主体性の尊重
- * 環境を通じた保育
- * 目的志向型ではない保育

小学校の**授業**とは違う **保育実践**

保育専門職としての自負

- * 研修の事実を公開
- * 実践のプロセスを伝える：PDCAサイクル
- * ドキュメンテーション：保育の可視化
遊びからの学びの姿の可視化

おわりに